氏　　名	松前　洋
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第 6347　号
学位授与の日付	2021 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Inverted Internal Limiting Membrane Flap versus Internal Limiting Membrane Peeling for Macular Hole Retinal Detachment in High Myopia （強度近視眼の黄斑円孔網膜剥離に対する内境界膜剥離法と内境界膜翻転法の術後成績を比較）
論文審査委員	教授 大内淑代　　教授 安藤瑞生　　准教授 安原隆雄

学位論文内容の要旨

強度近視黄斑円孔網膜剥離に対する内境界膜剥離法と内境界膜翻転法の術後成績について比較した。対象は強度近視黄斑円孔網膜剥離 100 眼。円孔閉鎖率、網膜復位率、術前後の視力(logMAR)、外境界膜および Ellipsoid zone(Ez)の回復率を後ろ向きに検討した。また、円孔閉鎖率と術後視力に関連する因子について、それぞれロジスティック回帰分析と重回帰分析を行った。43 眼に対して剥離法を行い、57 眼に対して翻転法を施行した。円孔閉鎖率と術後視力は翻転法が剥離法よりも有意に高かった(順に翻転法 80.7%、0.88±0.48、剥離法 37.2%、0.99±0.48、p<0.001、p=0.03)。網膜復位率と外境界膜および Ez の回復率は術式による有意差を認めなかった(順に翻転法 91.2%、10.9%、剥離法 79.5%、0.0%、p=0.229、p=0.12)。円孔閉鎖率に有意に関連した因子は術式（翻転法）であり、術後視力に有意に関連した因子は術前視力と術式（翻転法）であった。すなわち、強度近視黄斑円孔網膜剥離に対する術式として翻転法は剥離法よりも有効である。

論文審査結果の要旨

強度近視による黄斑円孔網膜剥離に対する眼科手術法には、内境界膜剥離法と内境界膜翻転法とがある。しかしこれまで、その術後成績について多施設多数例での解析がなされていなかった。本研究では、国内 7 施設における強度近視黄斑円孔網膜剥離、加療例 100 眼（剥離法 43 眼、翻転法 57 眼）について、円孔閉鎖率、網膜復位率、術前後の視力、外境界膜および視細胞内節-外節接合部の回復率に関連する因子について、ロジスティック回帰分析と重回帰分析法を用いて後ろ向き研究を行った。円孔閉鎖率と術後視力について、翻転法が剥離法より有意に良好であり、その他の項目については有意差を認めなかった。委員からは、選択バイアスの有無の可能性、内境界膜染色薬の種類等について質疑があった。本研究者は、解析結果および関連した知見に基づいて考察を行い、的確に回答した。

本研究は、強度近視による黄斑円孔網膜剥離に対する内境界膜翻転法の有効性について重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。